

善いことをした喜び

小川未明

青空文庫

さよ子^こは、叔母^{おば}さんからもらったおあしを大事^{だいじ}に、赤い^{あか}毛糸^{けいと}で編^あんだ財布^{さいふ}の中^{なか}に入れてしまっておきました。秋^{あき}のお祭り^{まつ}がきたら、それでなにか好^すきなものを買^かおうと思^{おも}っていました。

もとよりたくさんのお金^{かね}ではなかつたのです。けれど、さよ子^こはそれを楽^{たの}しみにして、ときどき机^{つくえ}のひきだしの中^{なか}から、赤い^{あか}毛糸^{けいと}の財布^{さいふ}を取り出^だしては、振^ふってみますと、中^{なか}に銭^{ぜに}がたがい^ふに触^ふれ合^あって、かわいらしい鳴^なき音^ねをたてるのでありました。

さよ子^こは、それでほおずきを買^かおうか、南京玉^{なんきんだま}を買^かおうか、それともなにかおままんごとの道具^{どうぐ}を買^かおうかと、いろいろ空^{くう}想^{そう}にふけたのであります。すると、なんとなく、その日^ひが待^ま

ち遠どおしかつたのでありました。

まことに、いい天気てんきの日ひで、のら仕事しごとの忙いそがしかったときでありました。家々いえいえのものは、みんな外そとの圃はたけに出でていて、家うちにいるものはほとんどありませんでした。

家うちの前まえには、大きな銀杏いちょう樹のきがありました。その葉はがしだいに色いろづいてきました。さよ子は壊こわれかかった石段いしだんに腰こしをかけて、雑誌ざっしを読よんでいました。そのとき、同おなじように、隣となりのおばあさんが、やはり家うちの前まえに出でて、日ひ当たりあたたのいい暖ぼしよかな場所ばしよにむしろを敷しいて、ひなたぼっこをしていました。

おばあさんは、日ひごろからたくさんなかねお金をためているといううわさがたつていました。けれど、おばあさんは、なかなかのけ

ちんぼうで、めったにそのお金かねを出だすということをしませんでした。

おばあさんは、このごろ、ひまさえあればお金かねのことを考かんがえていました。自分じぶんが死しんでしまったら、この金かねをどうしようかと思おもいました。これまでいっしょうけんめいのためた金かねを、他人たにんにやつてしまうのは、まことに惜おしいことだと思おもいました。せがれにも、嫁よめにも、この金かねはやれない、みんな自分じぶんが死しんでゆくときには、持もつてゆかなければならぬと思おもいました。

「いったい、いくらあるだろう。今日きょうは、せがれも嫁よめも留る守すだから、ひとつ勘かん定じょうしてみよう。」と、おばあさんは、だれもないのを幸さいわいに、懐ふところから大おおきな財布さいふを出だして、口くちを開ひらいて、楽たのし

みながら算えはじめたのであります。

「なかなかたくさんある。これをせがれめに見つけられたら大事だ。しかし、せがれも嫁も、まだ帰つてくるはずがないから安心だ。」と、おばあさんはひとり言をしながら、しわの寄つたてのひらに銭を並べて、細い指先で勘定しては、前垂れの中に移していました。そして、すっかり勘定してしまつたら、それを財布の中にしなうつもりでおりました。

ほんとうに暖かな、よく晴れた空に太陽が燃えて、風すらない秋日和でありました。大きな銀杏樹の上で、小鳥が鳴くほかに、だれもおばあさんを脅かすものはなかつたのです。

「おばあさん。」と、雑誌に読み飽きたさよ子は、あちらの石

段から、こちらを向いて、さびしいので呼びかけました。

もし、おばあさんが機嫌がよかつたら、そばへいつて、いま読んだおもしろいおとぎばなしを、おばあさんに聞かしてやろうと思つたのです。それは金銀寶石を積んだ幽霊船が、ある港へ着いたときに、そのお金や宝石がほしいばかりに、幽霊を自分の家につれてきて泊めた、欲深者の話でありました。

「おばあさん、おもしろいお話を聞かしてあげましょうか。」と、またさよ子はいいました。

けれど、おばあさんは、返事をしませんでした。

これはきつと機嫌がよくないのだらうと思つて、さよ子は、また雑誌を開いて、ほかのお話を読んでいたのでありました。

「うるさい子だ。何度呼んでも黙^{だま}っていてやろう。」と、おばあさんは、口^{くち}の中^{なか}でいって、知らん顔^{かお}をして銭^{ぜに}を勘^{かんじよう}定^{じよう}してしました。

そのうちおばあさんは、やつと銭^{ぜに}を勘^{かんじよう}定^{じよう}してしまいました。思^{おも}ったよりもたくさんのを喜^{よろこ}んで、またもとのように財布^{さいふ}に移^{うつ}しました。そして、もしや、身^みの周囲^{まわり}に銭^{ぜに}を落^おとしはしなかつたかと、ぐるぐる見^みまわしていました。

このとき、太鼓^{たいこ}をたたいて、一人^{ひとり}の哀^{あわ}れなじいさんの乞食^{こじき}が、「南無妙法蓮華經^{なむみょうほうれんげきよう}。」といつて、家^{うち}の前^{まえ}に立^たつて、あわれみを乞^こうたのであります。

けちんぼうのおばあさんは、乞食^{こじき}を見る^みのが大^{だい}きらいでありま

した。断るのもめんどうと思つて、手ににぎつていた財布を、急にむしろの下に隠して、目をつぶつて眠つたふりをしていたのであります。髪の毛の白くなつた、目のしよぼしよぼとしたじいさんの乞食は、いつまでもそこに立つて題目を唱えていましたが、おばあさんは、まったく眠つてしまつたように目をふさいで、じつとして身動きすらいたしませんでした。

しばらくして、乞食は、もはや望みのかなわなれものと思つてか、その家の前を立ち去つて、さよ子のいる方へと歩いてきました。やがて、さよ子の家の前に立つて、太鼓をたたいて哀れな声で題目を唱えたのであります。

さよ子は、おじいさんの乞食を見ると、急に目の中に、いっば

いの涙なみだがわいてきました。ほんとうにふしあわせの人ひとだと思おもつたからであります。さよ子こは、懐ふところの中から、赤あかい毛糸けいとの財布さいふを取り出だしました。そして、その中なかの銭ぜにをおじいさんにやってしまったのであります。

「ありがとうございます。」と、おじいさんの乞食こじきは、いくたびとなく、さよ子こに向むかってお礼れいを申もうしました。

さよ子こは、自分じぶんは、なんにも買かわんでいいから、もつとお金かねがあつたら、この哀あわれなおじいさんにやりたいものだこころうちと、心こころの中うちで思おもっていました。

「ありがとうございます。」と、また最後さいごに繰くり返かえして行って、おじいさんの乞食こじきは、家いえの前まえを立たち去さりました。

さよ子は、石段の上に立って、いつまでも哀れな乞食の行方を見守っていました。みまも、いつしか知らず、その太鼓の音は遠くかすかになつていったのであります。

その夜、さよ子は、お母さんに昼間の乞食のことを話しました。「いまごろ、あの乞食は、どうしたでしょうか。」とききますと、お母さんも、目に涙をためて、

「それでも、おまえのやったお金で、暖かいお芋でも買って食べることができらう。」といわれました。

これを聞いたさよ子は、心から自分はいいことをしたと思ひました。

一方、おばあさんは、ほんとうに居眠りをしてしまいました。

そして大事な財布を、むしろの下に入れたことを忘れてしまいま
した。

晩方、家に帰ってきたせがれが、その財布を見つけて大
喜びをしました。酒好きのせがれは、そのお金を見ると我慢す
ることができなくて、酒を飲みに出かけたそうです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 一」講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷発行

1977（昭和52）年C第3刷発行

初出：「童話」

1921（大正10）年1月

※表題は底本では、「善《よ》いことをした喜《よろこ》び」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2013年12月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

善いことをした喜び

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>